



西照寺寺報「さいしょう」 第38号
 2019年8月5日
 発行 浄土真宗本願寺派 西照寺
 高岡市吉久2丁目4-40
 郵便振替口座 00780-8-8185 西照寺
 西照寺WEB <http://nisitera.eek.jp>

祠堂永代経 勤修

左記のとおり今年度の祠堂永代経をお勤めいたします
 お参りくださいませ

おつとめの時間

八月二十五日(日) 午後二時 ～

二十六日(月) 午後二時 ～

布教使 高瀬 顕正 師 井波町浄教寺住職

西谷山 西照寺

この法要は、ご先祖を大切にしのぶ皆様の御懇志によって
 営まれています。西照寺郵便口座などご利用頂ければ幸甚です。

しょうしんげ
 正信偈のはなし 第十話

せつしんこうじょうご
 摂取心光常照護 已能雖破無明闇

(摂取の心光、つねに照護したまふ。すでによく無明の闇を破すといへども)

とんないしんぞうしうんむ
 貪愛瞋憎之雲霧 常覆真信心天

(貪愛・瞋憎の雲霧、つねに真信心の天に覆へり)

阿弥陀如来の光明は、常に私を照らし
 摂め取って護ってください。すでに
 無明の疑いの闇ははれていても、貪
 りや怒りの心は、雲や霧のように真実
 信心の空をおおっている。

(中面に続く)

月の影

本願寺中興の祖といわれるのは、第八代門主の蓮如上人です。この同じ室町時代には、「とんちの一休さん」として今日も親しまれている一休禪師がおられました。親交が深かったと伝えられています。いくつか、逸話が残っていますが、

ある時、蓮如上人の書かれたお手紙(御文章)を見ていた一休禪師は、蓮如上人に一首おくりします。

「阿弥陀には まことの慈悲は なかりけり たのむ衆生をのみぞ助くる」

阿弥陀様は、平等の慈悲であらゆるものを救う仏であるという。ところが「御文章」には、たのむ衆生は救うが、たのまん衆生は助からんと書いてある。たのむ者もたのまん者もみな救うのが真実の慈悲であって、これでは本当の慈悲の仏とは言えないのではないか、ということなのでしよう。

これに対して、蓮如上人は、
「阿弥陀には 隔つる心 なけれども 蓋ある水に 月はやどらじ」と返した、という話が残っています。

これは、親鸞聖人の師匠である法然上人が詠まれた「月影のいたら

ぬ里はなけれども ながむる人の 心にぞすむ」というところからの引用かと思えます。

阿弥陀如来の救いは成就され、月光のようにあらゆるものにすでに届いている。しかし、私たちの煩惱の雲霧がそれを見えなくしている。阿弥陀様側の問題ではなくて、むしろこちら側の問題だということなのです。



信心ということ

『聖人(親鸞)一流の御勸化のおもむきは、信心をもつて本とせられ候ふ』(御文章)と蓮如上人が言われるように、浄土真宗の根本は信心にあります。

信心とは、仏の教えを確信して疑わない心ですが、一般的には、神仏を信仰することや祈願することのようにも受け取られています。

ともあれ、誰が信心をするのかという私の心であり、主体は私の方にあると思っています。

ところが、仏教を学ばせていただく問題の核心は、自我に閉ざされた「自己中心性」「無明煩惱」にあると気づかされます。釈尊は、私たちの苦悩の根本原因を「無明」であると明かしてくださいました。明るく無いんです。明るく無いから正しく見れない、偏った見方になる。それを「分別智」といいます。私にとつて良いものと悪いものを分けて別にみる智慧です。因みに仏は、「平等智」「無分別智」といつて分け隔てなく平等にみる智慧です。

例えば、「若い」・「若い」、「病氣」・「健康」という状態があると、「若い」、「健康」が良いことのように見えてしまう。そして、そういう良いことのように見える状態の我でありたいと執着する。それを「我執」といいます。現実には「病氣」になり「若い」る私がいまから、その我執が私を苦しめ「煩惱」になっていくと教えてくださいました。

この正信偈のところでは、「貪愛・瞋憎の雲霧」と表現されています。この「自己中心性」「無明煩惱」は私の苦悩の根源であり、仏教はそれからの解放を説いています。しかし、それは私の生存そのものの本質であり、そこから解放されることは、現実に肉体をもつて生きている限り、構造的に不可能です。絶望するしかありません。

親鸞聖人は、『いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一

定すみかぞかし』と、煩惱の闇の深さを永遠に地獄から逃れることのできないわが身であると受け止めていかれました。こちらの側(私の心)に決定的な構造の欠陥がありました。

ですから、その欠陥の心で、信心をいくら深めていっても「自己中心性」「無明煩惱」が強くなるだけであつて、そこから解放されることにはなりません。

私の起こす信心には、真実はありません。

如来よりたまわる信心

それでは浄土真宗という信心とは、どういうことなのでしょう。

信心のことを親鸞聖人は、「眞信心」「金剛の信心」「清浄の信心」

「無疑心」などと表現されています。「うそ、いつわりのない清らかな

眞実の心」という意味でして、これは如来様の心を指しています。浄土

文類聚鈔には『信心はすなはちこれ(阿弥陀如来の)大悲心なるがゆ

ゑに、疑蓋(疑いの蓋)煩惱あることなし。』と述べてあります。

つまり、浄土真宗の信心とは、私の起こす心を言うてはなりません。如来の眞実の心(慈悲心)を言うてあるわけです。(裏面続く)

(中面からの続き) 私たちの命の事実(真実)は、「縁起するいのち」です。

一切の存在は、あらゆるものが相互に依存し関係し合いながら、仮に依り集って成り立っている。永遠不滅のようなものは存在せず、常に生滅変化を繰り返しています。日常用語で「地球は一つ」とか「宇宙は一つ」という表現のし方がありますが、そのようにあらゆるものはどこか「一つ」(一如^{いった})に繋がりに関わり合っている「いのち」を生きています。

しかし、この「いのち」を、これは誰ともかわりのない固定した私の命だ。私の人生だという「我執^{がしやく}」でしか見れない。その我執の通り、自分の思う通りにならない命だと言って「煩惱」となって私を苦しめ悩ませ、迷いを深めているとも気づかないのが私の姿でした。

こういう私のために、「縁起するいのち」の真実に目覚めたはたらきが、一如平等の世界からかたちをあらわし、形となって現れてくださった方が阿弥陀様であると親鸞聖人は受け取っておられます、

真実の信心は阿弥陀様のところにあります。その心を南無阿弥陀仏の名前に込めて私に「わたしの世界にこそ真実の救いがある」と呼びかけてくださっている。その如来のはたらきを受け取った姿を「信心」と表現はされています。

確かに信心は私の心に起こる現象ですが、私のものではありません。如来さまのお心(本願)を聞かせていただく、その願いの中に私の

生死を貫く道があると深くうなづけることがあります。仏様のお心が分

かり、何か信心をいただいたような気になります。その自信(慢心)が人師(指導者)となったり、如来の心が頂けない人を哀れんだりすることにつながっていきます。そのことは如来のお心と明らかにずれていません。仏法を聞けば聞くほど、私の心(煩惱)のなかに仏様の心を取り込んで、仏法からずれていく危険性を常にはらんでいる。

親鸞聖人は、如来の心(真実信心)をわが心(信心)にしてはならない。『弟子一人も持たず候』『御同朋御同行』(みな平等である)であると厳しく戒めていかれました。

私が起こす信心では救われません。

「如来よりたまわる信心」とか「他力(如来の本願力)の信心」、「信心」という言い方がしてあります。私の起す心なら「ご」という尊敬語は使いません。

「信知^{しんち}」(知らされる)、「信受^{しんじゆ}」(受け止めていく)、「信順^{しんじゆん}」(如来の仰せに順^{したが}っていく)という言い方もされています。

私の我執煩惱(私の信心)をものさしに生きるのではなくて、如来の願い(真実信心)をものさしとして、常に仰ぎ聞き続けていくことの大切さを、『信心をもつて本^{ほん}とせられ候』と表現してくださっているように思います。 合掌